イギリスにおけるマニュファクチュアの形成と商業資本的支配

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大學商學研究所 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 染谷, 孝太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5839

イギリスにおけるマニュファクチュアの形成と商業資本的支配

染谷孝太郎

目次

一　マニュファクチュア時代
二　主体的にみたマニュファクチュアの発生経路（イングランド）
三　技術的にみたマニュファクチュアの発生経路とマニュファクチュアの諸形態およびマニュファクチュアの諸特徴

一　マニュファクチュア時代

工業生産の歴史的発展形態は、「家内工業」(Hausindustrie)、「手工業」(Handwerk)、「マニュファクチュア」(Manufaktur)、「工場制工業」(Fabrik)（レーニンにおいては「家内工業」、「手工業」、「小営業」(Kleingewerbe)、「マニュファクチュア」、「工場制工業」）である。マニュファクチュアは、手工業ないしは、資本の原始的諸形態を伴う小商品生産と工場制工業との中間に位する工業生産形態であり、さらに資本主義的工業生産の形態としては、「資本主義的単純協業」(einfache kapitalistische Kooperation) と工場制工業との中間に位する工業生産形態である。

イギリスでは一五五〇年頃から一七七〇年頃まで、フランスでは十八世紀初頭から十九世紀の二—三〇年頃までの

時期がいわゆる「本来的マニュファクチュア時代」(die eigentliche Manufakturperiode) であり、それは産業革命前の資本主義的工業生産過程である。とくにイギリスにおけるマニュファクチュア時代は、第二次農奴制の発展期およびその崩壊期にほぼ照応し、さらに「資本の本源的蓄積」(ursprüngliche Akkumulation des Kapital) の発展期と絶対主義 (Absolutismus) の発展期および崩壊期にほぼ照応している。マニュファクチュアは、そのような封建制社会の解体期の中にあって最初にして確定的な資本主義的工業生産の形態であった。以上のような「本来的マニュファクチュア時代」の存在を否定したり、軽視したりしている人達がいる。それらの人達の見解を二—三検討してみよう。

カール・ビュッヒァー (Karl Bücher) は、工業生産の歴史的発展形態を①「家内仕事」(Das Hauswerk〔Hausfleiss〕)、②「賃仕事」(Das Lohnwerk)、③「手工業」(Das Handwerk)、④「問屋制度」(家内工業) (Das Verlagssystem〔"Hausindustrie"〕)、⑤「工場制工業」(Die Fabrik) と規定している。[1] ビュッヒァーは、マニュファクチュアを「従来世人が家内工業という誤解せる言葉をもって呼んできているが、これを改めて問屋制度と言うことが妥当である」[2] と考えている。彼は、マニュファクチュアという資本主義的工業生産の形態を否定して、そのかわりに前期的商業資本による小商品生産者支配の制度にすぎない問屋制度を工業生産の一形態として規定している。

彼は、同じ場所において問屋制度と問屋について次のように規定している。問屋制度は、従来の生産方法をそのままにしておいて、ただその販売を組織することに局限するものである。問屋は、商人的企業家であって、多数の労働者を自分の作業場の外側に、あるいは彼等の自宅において規則的に使用している。問屋に使用されている労働者は、以前手工業者 (または賃仕事者や農民) であったわけであるが、彼等は多数の消費者のために生産するのではなく、一人の商人のために生産を行なうようになる。生産物は、問屋の手を通じてそれぞれの生産者により市場商品として生産され、問屋の手を通じて世界市場に提供される。最初、問屋は、かなり独立性を保持していた小生産者に、ただ生

産物の購入代金を前払いし、あるいは原料を供給したり、出来高賃金(Stücklohn)を支払ったりし、さらに生産上重要な道具を所有したりしていた。しかしながら、その後小生産者が一人の商人とのみ関係を結ぶようになると、小生産者はいつのまにか問屋に対する隷属関係を深め、ついには問屋の労働者に転化してしまう。(3)

前期的商業資本が小商品生産者を支配する制度としての問屋制度を特定段階の工業生産の歴史的発展形態として、規定することは誤りである。工業生産の歴史的発展形態あるいはその存立形態と商業資本による小商品生産者支配の形態とはあきらかに異なるものである。ビュッヒァーにおいては、工業生産の歴史的発展形態の一つであるマニュファクチュアをみずに、問屋制度を工業生産の歴史的発展形態の一つにすりかえている。

マニュファクチュアは、一つの屋根の下で多数の労働者を支配するとともに、その経営基盤が劣弱であるために多数の小商品生産者を存立せしめて、それらをマニュファクチュアの外業部として問屋制的に支配する。その場合の小商品生産者は、その作業場を自宅に持っており、外見的にはマニュファクチュアから独立しているが、マニュファクチュアから主要な原材料や道具を支給されていたり、資金の融通を受けていたりしていて、マニュファクチュアに実質的に従属した分散的な労働者である。マニュファクチュアによって問屋制的に分散的に支配されている小商品生産者は、「事実上の賃金労働者」であり、「資本主義的家内労働」(kapitalistische Heimarbeit)を形成する。

要するにビュッヒァーは、前期的商業資本による小商品生産者支配の最高形態においては、問屋制商業資本が事実上の産業資本に移行し、小商品生産者が「事実上の賃金労働者」に移行することをみのがしている。さらに彼は本来的マニュファクチュアが形成された後においても、一つの屋根の下での労働者の集中的支配と関連して、分散的な外業部支配が問屋制的により広範に展開されるということをみのがしている。彼は、従来からの小商品生産者に対する商業資本による問屋制的支配の広範な存在とマニュファクチュア(ビュッヒァーはこれも問屋として理解している)による

問屋制的支配の広範な存在との側面のみをみて確定的なマニュファクチュアの存在をみのがしている。これが問屋制度を工業生産の歴史的発展形態の一つとして彼をして理解せしめた直接の原因である。

以上のところであきらかなように、ビュッヒァーは、工業生産の歴史的発展形態を「家内仕事」、「賃仕事」、「手工業」、「問屋制度」(家内工業)、「工場制工業」として理解し、マニュファクチュアを除外しているのであるが、イギリスの羊毛工業の歴史的発展形態についてビュッヒァー的な理解をしているのはウィリアム・アシュレー(William Ashley)である。彼は、中世以後の羊毛工業の歴史的発展形態を「ギルドまたは手工業制度」(the gild or handicraft system)、「家内制度または家内工業」(the domestic system or home industry)、「工場制度」(the factory system) と規定し、そして「家内制度または家内工業」の段階においては小さな家内作業場における実際の製作者と最終購買者との間の媒介者として働く諸種の「商業的中間者」(comercial middlemen) の存在が特徴的であるとしている。(4) 彼は、このように本来的マニュファクチュア時代を除外している。彼は、これらの点について次のように言っている。「毛織物の販売に従事する人々が、みずから羊毛を購入し、糸を紡がせ、かつ貧しい織布工に必要な原料を供給することによって、その製造を確保せんと企てるのは自然であった。……職人のために原料と雇用を見出す商業的中間者の支配によって特徴づけられる段階に到達したのである。経済学者たちは、……それにつづく『工場制度』に対して、製造過程がなお労働者自身の家で行なわれるという事実から、この事態を『家内制度』または『家内工業』というあまり適切でない言葉で呼びならわしている。われわれがそれをどう呼ぶにせよ、ここで明瞭に独立の手工業者を持ったギルド制度と多数の労働者を持った工場とのあいだの中間ないし過渡段階を識別すべきである」としている。

とにかくアシュレーは、「雇主の糸で織上げることがしばしば織布工のならわしとなっている」時代ないしは「職人のために原料と雇用を見出す商業的中間者の支配によって特徴づけられる段階」を「家内制度または家内工業」の

段階と考えている。しかし彼の言う「家内制度または家内工業」は、ビュッヒァーの「問屋制度」(家内工業)に該当するものであり、工業生産の歴史的発展形態の一つを形成するものではなく、先に説明したように産業資本化しつつある商業資本による工業的小商品生産者支配の形態にすぎない。さらにアシュレーの場合はビュッヒァーの場合とほぼ同様に、商業資本による小商品生産者の問屋制的支配とともに、場合によってはマニュファクチュアによる小商品生産者の問屋制前貸的支配の形態をも「家内制度または家内工業」と考えている。

正確に言うならば、最終的に産業資本化した商業資本(事実上の産業資本)あるいはマニュファクチュアによる小商品生産者の問屋制前貸的支配、たとえば「企業家から受けとった材料の出来高払いによる家内加工」は、工業生産の一定段階を特徴づける「家内制度または家内工業」と言われているものではなく、実は「マニュファクチュアの付属物としての資本主義的家内労働」なのである。先にアシュレーが言っている「職人のために原料と雇用を見出す商業的中間者」は、たんなる商業的中間者ではなく merchant manufacturer であり、「雇主の糸で織上げることがしばしば織布工のならわしとなっていた」と言う場合の織布工は、たんなる商業資本の従属物ではなく、最終的に産業資本化した商業資本あるいは形成過程にあるマニュファクチュアの付属物としての資本主義的家内労働(者)である(念のためにことわっておくが、問屋制商業資本が小商品生産者を問屋制的に支配する場合には、産業資本の分散的支配の対象であり、その付属物である資本主義的家内労働ではなく、問屋制家内工業を発生せしめる)。

ビュッヒァーもアシュレーも、彼等が言っている問屋や商業的中間者の多くが実はマニュファクチュアだという事実をみのがしており、同時に彼等の言う家内工業者が実は「事実上の賃金労働者」あるいは資本主義的家内労働(者)だという事実をみのがしている。

またアシュレーがマニュファクチュアについて語る場合、一部の巨大な特権的マニュファクチュアについてのみ注

意し、それらが永続性を持たなかったということをもって「本来的マニュファクチュア時代」を否定している。彼は、問屋制的支配の下にある工業的小商品生産者の過多性にのみ注意し、その背後で滅びてはまた台頭しながら一時代を支配したマニュファクチュアの存在をみのがしている（この傾向はドッブにもみられる）。

マルクス主義的思考方法を経済史研究の面において発展させることにある程度貢献したモーリス・ドッブ（Maurice Dobb）の場合でさえも、マニュファクチュア研究の面においては、十七、八世紀におけるイギリスのマニュファクチュアの存在を過小評価して「問屋制度」や「家内工業」の存在を過大評価している。

すなわち「商人製造業者（merchant-manufacturers）によって組織された『前貸制度』（putting-out）または『問屋制度』（Verlag-system）に加えて、直接賃金を支払って労働者を雇用する資本家所有の製造所（factories）の例も少数ではあるが存在していた。しかしながらこの当時これらの事例は、織物業（textile trades）においてはまれであり、そこでは仕上工程は別として、生産用具は、まだ工場生産の技術的基礎となりうるところまで複雑なものではなかった。使用される生産用具は、なお中産的手業者（craftman of modest means）の手のとどくところにあった。それらの用具は、小屋や屋根裏部屋に楽にとりつけられた。そして労働は、高度に個別化されていたので、マニュファクトリー（manufactories）と家内工業的生産の唯一の差異は、前者においては多数の織機が多くの労働者の家の中に分散しないでおなじ建物の中に並べられているという点であった。生産の位置は、生産過程の性格になんらの変化をともなうことなしに集中された。この段階においては、作業場の内部における細分された分業、または集中の結果としての統一的なチーム・ワークの機会は、ほとんど存在しなかった。これに反して仕事を手工業者の家に出した場合には、資本家は工場の維持費と監督費とを節約することができた。縮絨工場（fulling-mill）や染色工場（dye-house）をのぞけば、織物の工場生産は、十八世紀の後半までは例外的存在であった[5]」。さらにドッブは言葉を続けている。「使用されてい

る資本量、それと関連している資本家数および雇用されている労働者数という点において、工場生産は、あきらかに『家内制度』(domestic system) の下での生産よりも重要性が少なかった。……一例をあげれば、われわれが引合いに出した資本家所有の施設のあるものは、マルクスが言っている厳密な意味でのマニュファクトリーとして分類してもよいであろう。このことは、たしかにニューベリーのジャックやトーマス・ブランケットの織物工場にあてはまる。同様に、それはあきらかに十七世紀の中頃、スコットランド地方に開設された織物マニュファクトリーのあるものにあてはまるのであるが、そのなかではおそらくハッディングトンのニュー・ミルがもっともよく知られている。しかし全体としてみれば十七世紀のイングランドにおいては、工場ないしはマニュファクチュア作業場 (manufacturing workshop) よりも家内工業が生産のもっとも典型的形態であった。しかもマニュファクトリーは、当時たとえばフランスのある地方における場合よりもイングランドにおける場合の方が一般的でなかったように思われる」(6)。

ドッブは、十六—七世紀と十八世紀のマニュファクチュアについて語る場合、一部の巨大マニュファクチュアと特権マニュファクチュアについてのみ指摘し、当時の工業生産において重要かつ典型的であったのは「家内工業」であったと主張している。ドッブが指摘している羊毛工業における巨大マニュファクチュアの例としては、ジョン・ウィンチコム (John Winchcomb) 通称ニューベリーのジャック (ロンドンの富裕な毛織物商人の息子で、巨大織元のところに徒弟奉公に行き、自分の親方の未亡人と結婚し、数百人の織布工と、さらに数百人の紡毛工、縮絨工、仕上工を使用し、染色工場と縮絨工場も持っていた)、同じニューベリーのトーマス・ドールマン (Thomas Dolman)、ブリストルのトーマス・ブランケット (Thomas Blanket)、ウィルトシャーのウィリアム・スタンプ (William Stumpe) (マームスベリーの修道院とオックスフォードシャーのオスニー修道院とを賃借りして、その中に織機と織布工を入れ、二、〇〇〇人の労働者に毛織物を生産させていた) 等である。アシュレーは、羊毛工業における巨大マニュファクチュアの例として前述したジョン・ウィンチコ

ム、ウィリアム・スタンプの外にバーフォードのタッカー(Tuckar)(アビンドン修道院を借りて五〇〇人の労働者を働かせていた)等を指摘している。

これらのマニュファクチュアは、巨大ではあるが長続きしなかった事例であるが、これらをもってアシュレーのように「本来的マニュファクチュア時代」を否定してしまうことは誤りである。通常マニュファクチュアは、工場制工業の場合もそうであるが、あらわれては消滅し、あらわれては消滅しながら増大し、ある一定の歴史的段階においては、工業生産における支配的存在となり得たものである。毛織物工業のすべての工程において同時にマニュファクチュアが支配的になったとはみられないが、仕上工程の面よりマニュファクチュアは次第にその支配力を増大し、やがて織布工程や紡毛工程にまで発展したとみられている。マニュファクチュアを過小評価して「家内工業」を重要視しているドッブは、「問屋制度(the cottage system)が普及していたところでさえ、しばしば仕上工程は織元が所有している大工場(large mill)で行なわれたが、いずれにしても西部地方ではそうであった」[7]と言っている。ドッブにおいては、羊毛工業におけるマニュファクチュアは一部の巨大マニュファクチュアと西部の仕上工程にみられるマニュファクチュア、それに前に引用した縮絨工程や染色工程におけるマニュファクチュアのみであったとみる傾向が顕著のように思われる。なおドッブは、鉱山業、製鉄業、煉瓦製造業、製塩業、火薬製造業、製紙業、醸造業、真鍮製造業、針金製造業における、巨大なあるいは特権的なマニュファクチュアの例をあげているが、全般的にみると十七世紀のイングランドではマニュファクチュアよりも家内工業(マニュファクチュアや商業資本の外業部)が生産におけるもっとも典型的な形態であったとしている。われわれは、ドッブにおいても以上のようにブルジョア史学の影響をみないわけにはいかないのである。

ドッブのマニュファクチュアの典型的存在を軽視して家内工業の典型的存在を重視する見方は、おそらくポール・

マントゥー (Paul Mantoux) の著書「十八世紀における産業革命—イギリスにおける近代大工業の起源についての試論」(La Révolution industrielle au XVIIIe siecle. Essai sur les commencements de la grande industrie moderne en Angleterre.) に依拠したもののように思われる。すなわち、「この織元は製造業者 (manufacturier) とよばれるが、かれらはなによりも商人であって、そのいとなむのは製造ではなく、購入と販売である。そして、旧イギリスでもっとも重要な羊毛工業において、本来的マニュファクチュア(manufacture proprement dite)、資本家の実際の指揮のもとにおかれた大作業場の存在は、十八世紀まで、まったく例外的であったことを注意しなければならない。それはフランスにおけるように、王権によって助成され、組織されることなく、むしろ反対に当初は危険な新形態として公然と非難された。よしんば禁止的立法が完全にこれを阻止しなかったにしても、おびやかされた伝統と利益を強化することによって、すくなくとも発達をおくらせた。小工業は存続したのみか、生産者が独立をうしなったところでさえ、旧家内工業形態は消失することはなかった。そして、ほとんど不変の技術的方法をもって、なにものも変化しなかった、という幻想をいだかせた」[8]としている。T・S・アシュトンは「フランスには、同国人にイギリスを解説することによって、かえってイギリス人に自国の理解を深めた一系列の著作家——こういうと、すぐヴォルテール、テーヌ、エリ・アレヴィなどの名が思いうかんでくる——があらわれたが、ポール・マントゥーもその一人である」と言っている。まさしくドッブは、フランス人であるマントゥーの影響を受けて、イギリスのマニュファクチュアを伝説的に言われてきた巨大なマニュファクチュアに限定する傾向が顕著であり、前期的商業資本の小商品生産者支配によるマニュファクチュアへの接近をみながら、それから本来的マニュファクチュアが形成され、本来的マニュファクチュア時代が存在したことを軽視している。

マントゥーは、前述したように本来的マニュファクチュアの存在を軽視してはいるが、「現象の継起が連続的で、

感知しにくい」にもかかわらずマニュファクチュア時代が存在したことを次のように認めている。「マニュファクチュアと大工業のあいだには、截然たる区別がないと主張しうるし、また両者の区別よりも、むしろ共通な特質を強調することもできる。……しかし輪郭は散漫であるにせよ、ある一群の事実が一体をなし、みずからしめる位置によって、経済史の重要な時期にその特徴をなしているのをみわけるのは容易である。各時代を規定するには、支配的―へルトによれば指導的（tonangebend）な傾向を認識するだけでよいのだ。そのうえこの継起的諸段階を区別し、その特質を規定することにつとめる一方においても、われわれはその段階が結局、同一の発展のことなった時期にすぎない点をわすれることができないのである」[9]としている。

以上のようにマニュファクチュアを工業生産の歴史的発展形態のなかから除外したり、あるいはマニュファクチュア時代を軽視したりする論者もいるが、イギリスにおいては十六世紀の中葉から十八世紀の最後の三分の一期にいたるまで、マニュファクチュアは、賃金労働者を集中的にあるいは分散的に支配しながら、「分業にもとづく協業」の組織を編成して、どちらかと言えば相対的剰余価値を生みだすための特殊的方法をもっとも典型的に展開したのである（同時にマニュファクチュアは、外部的には、小商品生産者を前期的商業資本が支配したときのように支配し、譲渡利潤的な利潤の収奪も行なっていた）。

(1) Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, Bd. 1, 1922, S. 167.（カール・ビュッヒャー著、権田保之助氏訳「国民経済の成立」一七一頁）。
(2) Karl Bücher, a.a.O., S. 185.（前掲書邦訳一九〇頁）。
(3) Karl Bücher, a.a.O., S. 185f.（前掲書邦訳一九〇―一頁）。
(4) William Ashley, Economic Organization of England, p. 36.
(5) Maurice Dobb, Studies in the Development of Capitalism, p. 138.（モーリス・ドップ著、京大近代史研究会訳「資本

主義発展の研究」I一九八頁)。

(6) Maurice Dobb, op. cit., pp. 142～3. (前掲書邦訳二〇三—四頁)。

(7) Maurice Dobb, op. cit., p. 139. (前掲書邦訳一九九頁)。

(8) Paul Mantoux, The Industrial Revolution in the Eighteenth Century, p. 68. (ポール・マントウー著、徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明諸氏訳「産業革命」六四頁)。

(9) Paul Mantoux, op. cit., pp. 41～2. (前掲書邦訳二四—五頁)。

二 主体的にみたマニュファクチュアの発生経路(イングランド)

「封建的生産様式からの移行は二重の仕方で行なわれる」(Der Uebergang aus der feudalen Produktionsweise macht sich doppelt)[1]。近代産業資本の範疇であるマニュファクチュアは、種々の仕方で発生するであろうが、主として次の二つの経路を通じて発生する。

第一の経路は、「生産者が商人兼資本家となる」(Der Produzent wird Kaufmann und Kapitalist) 場合である。すなわち小商品生産者が商人兼産業資本家となって、農業的自然経済や中世的都市工業の同職組合的手工業に対立して、封建的生産様式をうち倒して資本主義的生産様式をうち立てる場合である。「これは現実に革命的な経路である」(Dies ist der wirklich revolutionierende Weg)。小商品生産者である「産業的中産者」(industrieller Mittelstand) は、勤勉と節約によって貨幣的富の蓄積を行ない、それを資本に転化し、自らは資本主義的単純協業の経営者すなわち小資本家 (lilliputian capitalist, kleiner Kapitalist) となり、やがて厳密な意味でのマニュファクチュラーになることが可能であった。

小商品生産者の努力によるより大きな作業場の創設は、資本主義的工業生産への移行をもたらす。資本主義的単純

協業は、「同じ個別的資本がより多数の労働者を同時に就業させ、したがって労働過程がその範囲を拡大して生産物をより大きい量的規模で提供するばあいに、はじめて始まる。より多数の労働者が、同時に同じ空間で（または、同じ労働場所でといってもよい）同じ種類の商品の生産のために同じ資本家の指揮のもとで働くということは、歴史的および概念的に資本制的生産の出発点をなす。生産様式そのものに関しては、たとえばマニュファクチュアは、その初期においては、同時に同じ資本によって就業させられる労働者がより多数だということ以外には、同職組合的手工業とほとんど変わりがない。同職組合親方の作業場が拡大されているだけである。(2)」

小商品生産と資本主義的単純協業の区別は、「さしあたり単に量的」であり、同時に就業している労働者の数の多い少ないの違いにすぎなかった。しかしより多数の労働者の使用は、生産そのものに重要な変化をもたらし、生産状態そのものを改善することになる。小商品生産においては、個々の労働者の腕力、練達、技倆の差異はいちじるしい。したがって小商品生産は、家族を中心とした少数の労働者の個人的能力に左右され、生産と販売は不規則、不安定となり、しかも労働手段の完全利用が行なわれず、商品のコスト高現象が目立つことになる。それに対して同じ経営者の下で雇用労働者の数がより多数となると、労働者の個人的能力の差異は、仕事場のなかで平均化され、社会的・平均的労働が形成される。そこでは、生産と販売はかなり増大し、規則的、安定的となり、しかも労働手段の共同使用によるより完全な利用が行なわれ、商品のコスト安現象と販売市場での有利な状態を獲得することができる。資本主義的単純協業の小商品生産に対する有利さはほぼ確実なものとなる。このように比較的多数の労働者を同じ労働過程で同時に就業させる工業的生産は、資本主義的単純協業をつくり出すことになり、資本主義的生産の出発点を形成する。

また以上のところで説明したように資本主義的単純協業と小商品生産との違いは同時に就業している労働者の数の違いにあるにすぎないのであるから、前者は社会的にみると数も少なく、目立ったところがとぼしく、ややともする

と後者に逆もどりする可能性さえあった。このようなことを根拠にして言えることは、資本主義的単純協業が資本主義的生産過程の独自的でしかも基本的な形態であることには間違いないが、「資本制生産様式のある特殊的発展時代の固定的・特徴的な形態をなすものではない」ということである。資本主義的工業生産がより確定的発展をとげるようになるのは、資本主義的単純協業がマニュファクチュアに成長してからのことである。

しかし十五世紀の八〇年代から十六世紀の二〇年代にいたる地理的諸発見の時代を経過してもたらされた新世界市場の形成とイギリスを中心とした西ヨーロッパ市場の急速な発展が行なわれたなかでは、小商品生産者の勤勉と節約による個人的努力は、作業場の拡大と労働者の数の増大とを「蝸牛的」に進行させはしたものの、本来のマニュファクチュアにまで発展させることは全然不可能ではなかったとしてもなかなか困難であった。

ところが一般の経済史研究においては、小商品生産者の商人兼産業資本家への成長を裏付けようとする主張が多数を占めているように思われる。イングランドの毛織物生産は、東南部のノーフォークからケントにかけて始まったわけであるが、そこでは北部に比較して封建領主的支配が強く、しかも問屋商人や織元ないし中間商人の支配下で苛酷な家内労働に従事していた小商品生産者が多かった。これらの東南部地方の毛織物工業は、十六世紀中葉以後次第に北西部に勃興してきた毛織物工業によってその指導性をうばわれた。北西部ことに北部のヨークシャーやランカシャーにおいては、領主的支配が比較的少なく、自由な小土地保有農民が多かった。しかも自由な小土地保有農民に対する問屋制的支配は東南部ほど強くはなかった。

なぜ東南部に比較して北部ことにヨークシャーにおいては、毛織物工業が勃興してかなり後まで問屋制的支配が弱かったのであろうか。アシュレーは、その理由としてヨークシャーことにウエスト・ライディングは相対的に貧しい地域であって、農業上の富において南部の肥沃な諸州にはるかに劣っており、ロンドンやノリッジの資本家たちから

遠く離れていたからだと言っている。ドッブは、カニンガムの「イギリス商工業の発達」に依拠しながらその理由としてヨークシャーの織布工が、粗悪な毛織物むきの地方産の羊毛（固定資本がまだ比較的重要な役割をもつ以前の毛織物工業にとって重要な生産手段であり、羊毛の供給はしばしば商人による問屋制的支配の道具として使用された）を容易に入手できたので、地方市場で必要な羊毛原料を購入し、出来上った製品を自由に商人に売ることによってかなりの独立性をもっていたと言っている。(3)

リプソンが言っているようにヨークシャーにおける「小織元」(working clothiers) あるいは「小製造業者」(domestic manufacturers) は、農業におけるヨーマンの相対物であり、彼等自身の織機や原材料を所有し、あるいはささやかな資本を所有し、それをもって販売すべき織物を生産し、週末に商人に自由に売っていた。(4) そしてその金で原材料や家族のための消費資料を購入していたのである。彼等は、原料の羊毛をみずから買い出しに市場に出かけ、織物を織り上げると肩にかついで市場を訪れ、みずから販売し、帰りには再び少量の羊毛をかついで帰る小親方 (small masters) であった。(5)

ヨークシャーにおいては、ヨーマンの片われであり小親方である毛織物関係の小商品生産者は、種々の障害（商業資本の問屋制的支配）をのりこえて作業場の設備を拡張し、賃金労働者を雇用して、家族労働中心の生産から雇用労働中心の生産にきりかえ、ある程度「分業にもとづく協業」の組織をとり入れた小マニュファクチュアを形成することが他の地域に比較してより可能であった。(6) このような考え方を秦玄竜氏はしているわけであるが、さらに白杉庄一郎氏は、大塚久雄氏に依拠してアシュレーを批判しながらヨークシャーにおける「問屋制商業資本から独立した毛織物製造業者の存在」とそこにおける「独立生産者からマニュファクチュアへの発展」を強調し、なお同じような傾向が「西部および南部イングランドにおける問屋制度の支配下にも検出されえたはずである」(7)としている。

大塚久雄氏は、ヨークシャー西部(ウエスト・ライディング)およびそれに隣接するランカシャー(第一の経路を主張する人達に比較的有利な地域)ばかりではなく、イングランド西部およびイースト・アングリア(とくに東南部においては商業資本の問屋制的支配が強かった)においても小商品生産者から「典型的マニュファクチュア」への移行がかなりの程度存在したことを強く主張している。

大塚久雄氏は、アンウィンに依拠しながらイングランド北部においてのみ小商品生産者がマニュファクチュラーに転化したのではなく他の諸地域においても、多少の差異はあるが、商業資本よりもむしろ小商品生産者がマニュファクチュラーに転化したことを主張しているのであり、とくに羊毛工業の紡毛工程を除いた織布工程と仕上工程においてその傾向が顕著であったとしている。「即ち、紡毛が貧民の婦人及び小児労働によって謂はば副業的な家庭労働として営まれたのに対比して、織布工はすでに此の頃には一般に一家をなせる成年男工であり、而もともかく『職場主』—其の職場が住宅の一部であるにせよ—と言ふ姿をとっていた。……広義で『小親方』とよばるべき相貌を具へていたのである。……彼等が『問屋』織元に対する関係において、紡毛工の場合に比し、全体として比較的有利な、或いは言いうべくんば一歩独立に近い地位にあったことはあらそいがたい。……織布工のうちの或る者の職場が漸く拡大せられ、単なる家内工業(小商品生産)の標準的規模を超えて謂はば初期マニュファクチュアとも言うべき工業経営形態(生産形態)に成長しつつある傾向が明瞭に看取される」[8]。「さらに、織布工程につづく仕上工程においても事情は略々同様であって、就中縮絨工の職場がマニュファクチュアの方向に拡充されゆく動向を看取しうる」[9]としている。

大塚氏は、右のような主張をするかたわら、紡毛工程はもちろんのこと織布工程や仕上工程においてさえも問屋織元が「問屋制前貸人」として小商品生産者を支配したり(問屋制家内工業)、マニュファクチュアを支配したり(問屋制マニュファクチュア)していたことを指摘している。また秦玄竜氏は、大塚氏や白杉氏と同じように第一の経路をとく

に移行における歴史の重要なコースとして主張しているにもかかわらず、「こうした独立の小企業でもその資金や原料関係から、いつか問屋商人の支配下にはいったり、大織元の外業部的存在となる場合があったにちがいない。さらに一人の独立生産者が、その一部を問屋の組織の中におき、半独立の企業と化することもあった。したがって初期マニュファクチュアと問屋組織とのからまり合いはむしろ通常のことで、その形態はきわめて複雑であった」[10]としている。これらの人達も第二の経路の存在を指摘しているわけであるが、これらの人達も含めた多くの経済史研究家達は、自由で独立的な小商品生産者の「国民的」なマニュファクチュアへの自成的展開を強調したがる傾向が顕著である。なお「西洋経済史講座」における中木康夫氏や大河内暁男氏等も基本的には以上のような立場をとっているように思われる。[11]

第二の経路は、「商人が生産を直接的に占領する」(Der Kaufmann bemächtigt sich der Produktion unmittelbar) 場合である。すなわち前期的商業資本家は、小商品生産者に対する、たとえば羊毛の販売と出来上り商品(毛織物)の買取りという初歩的な業務を次第に強化・発展させて、流通過程収奪から生産過程収奪にくいこむことによって、自らが事実上の産業資本家となり、やがて本来の産業資本家(マニュファクチュラー)になる場合である。このような過程はとくに十七世紀の織元でもある「反物商」(clothier, Tuchhändler) がたどった道である。このような移行の仕方は、即自的にも向自的にも旧生産様式を変革することはほとんどなく、むしろ旧生産様式を保存し、自己の前提として維持する傾向が顕著であり、「保守的」な移行の仕方である。

前述したように封建的生産様式からの移行は二重の仕方で行なわれるわけであるが、より詳細には三通りの移行が行なわれた。第一は、前期的商業資本家が直接産業資本家となる場合である。商業を基礎とする産業ことに奢侈品製造業におけるように、商人が原料や労働者とともに外国から移植・導入することによってマニュファクチュアを創設

する場合である。第二は、商人が小親方を自分の仲介者たらしめるか、あるいはまた直接に自立的生産者から買う場合である。商人は、生産者を名目的には自立させておき、その生産様式を変化させないでおくのである。第三は、生産者が商人となって、直接に商業のために大規模に生産する場合である。

封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行にさいしてとくに重要な仕方は、二重の移行の仕方のうち、とくに第二の経路であり、さらに三通りの移行の仕方のうち第二の場合である。前期的商業資本は、小商品生産者を名目的に自立させ、しかも旧来の生産様式を維持しながら、彼等を分散的に支配し、自らのために労働させる。[12] 前期的商業資本は、小商品生産者を問屋制前貸制の支配下におき彼等の作業場を問屋制家内工業として再編成し、さらに資本主義的家内労働にまで転落させる。そこにおける資本は、たんなる前期的商業資本ではなく、事実上の産業資本であり、そこにおける名目的に自立している小商品生産者は、事実上の賃金労働者である。前期的商業資本または事実上の産業資本と直接的生産者の間に手工業的小親方が介在したとしても、資本による生産の分散的支配の本質には変りがない。

前期的商業資本は、前資本主義的生産関係を維持しながら、小商品生産者の生産過程へ最初は分散的な仕方で支配的に喰込み、そのことによって前期的商業資本の古き母体を蚕食しつくして、自己否定による発展的転化をよぎなくされる。移行におけるこのような経路は保守的ではあるが歴史的に重要であり、支配的な経路である。

前期的商業資本が近代産業資本ことにマニュファクチュアに移行する歴史的過程は、主要な地理的諸発見が終了し、それを契機とする世界市場の突如たる拡大、流通商品の急増（アジア的諸生産物の搬入、アフリカ的諸資源の掌握、アメリカからの金銀の搬送、羊毛生産物の増大）、物価の急上昇がみられ、国家権力を背景に重商主義的植民競争が行なわれ、国債制度、租税制度、各種の保護制度が創設・整備される過程であった。このような過程のなかでは、小商品生産者

あるいは産業的中産者の勤勉と節約によるマニュファクチュアへの自成的展開よりも、前期的貿易商業資本や問屋制商業資本（相互に結び合っている場合もある）の詐略と欺瞞を媒介とする小商品生産者収奪の方法によるマニュファクチュアへの発展的転化の方が歴史的に現実的な経路であったように思われる。急激な経済変動に対応し得た小商品生産者もかなり多く存在したであろうが、支配的にしかも最も重要な対応をしめし得たのは商業資本であった。外国貿易と国内商業によって獲得された資本と小商品生産者に対する問屋制的支配によって獲得された資本の主要な部分はマニュファクチュアの形成に役立てられた（旧型の絶対主義＝重商主義の諸国では外国貿易と国内商業によって獲得された資本がマニュファクチュアの形成に影響しあるいは役立たず、封建的支配階級の政治的・経済的地位の維持に主として消費せられた場合もある）。しかし商業がどの程度まで旧生産様式の分解を生ぜしめるかは、さしあたり旧生産様式の堅固さと内的編成とに依存する。またこの分解過程がどんな結果を生ぜしめるか、すなわちどんな新たな生産様式が旧生産様式の代りに現われるかは、商業にではなく、旧生産様式そのものの性格に依存する。中世的な農奴制とギルド規制とがあまりに強固で、単純な商品・貨幣流通の存在が極度に制限されているところでは、前期的商業資本の発展はのぞめないのであり、小商品生産者支配を強化しながらマニュファクチュアを形成することは困難となる。封建体制の矛盾の増大、たとえば農民一揆の高揚やその結果としての自営農民の形成によって、その内的編成の堅固さがゆるみだしたときに、小商品生産と単純な商品・貨幣流通の発展がみられ、前期的商業資本の旧生産様式への分解作用は基本的に生ずる。その作用は、世界市場の突然の拡張、流通する商品の急増、アジアの生産物やアメリカの資源を支配しようとするヨーロッパ諸国民間の競争、植民制度の発展と関連することによって倍加された。このような諸条件がもっともよくそなわった国はポルトガルやスペインよりもオランダであり、オランダよりもイギリスであった。

小商品生産者の分散性と孤立性、彼等相互間における経済的不和と闘争の存在は、前期的商業資本の商品買占業務

と原・材料の販売業務とをいちじるしく有利にする。このような状態は、前期的商業資本の小商品生産者支配の状態(形態)を発展させることになる。第一、もっとも単純な形態は、商人(または大きな仕事場の経営主)が小商品生産者から製品を買いとることである。ところが、農民がいつでも商品を売ることができる唯一の人物(買占人)にまで商人がなりあがると、彼は、その独占的地位を利用して、小商品生産者に支払う価格を際限なく引下げる(小商品生産者を販売市場から遮断する)。第二、買占業務と高利貸業務との結合による小商品生産者からの収奪は、商人のより苛酷な収奪の形態である。たえず金にこまっている小商品生産者は、買占人から金を借り、あとで商人によって人為的に下げられた最低価格の商品で負債を返債する。小商品生産者は、債権者である商人に人格的に隷属し、賃金労働者以下になり債務奴隷化する。第三、商人は、小商品生産者が生産した商品の代価を自らの取扱い商品で支払いを行なう(一部または全部)。第四、商人は、小商品生産者が生産した商品の代価として、後者が必要な原・材料で支払いを行なう(小商品生産者を原・材料購買市場から遮断する)。このことは、資本主義的生産関係の発展における非常に大きな前進を意味する。第五、買占人が小商品生産者に加工材料を直接配分する形態である。この支配形態は、買占人が小商品生産者を支配する最高形態である。ここにおいて小商品生産者は「事実上の賃金労働者」となり、買占商人は事実上の産業資本家となり、「資本主義的家内労働」を編成する。[13] 前期的商業資本はこのようにしてマニュファクチュアに接近するのであり、本来のマニュファクチュアが形成されるためには、もうあと一歩である。

通常のイギリス経済史の研究によれば、ヨークシャーとくにウエスト・ライディング地方においては、第一の経路が支配的であったということになっている。そこにはきわめて少額の資本を所有する小製造業者が沢山いたことは事実である。彼等は、羊毛を自分自身の金をもって商人から買い、自分自身の家で妻子および二—三人ないし六—七人の職人に手伝わせて、さまざまな工程を経てそれを未仕上毛織物に生産していた。

リーズ周辺においては、一八〇六年に約三五〇〇人以上の小製造業者がいた。彼等はほとんど同じ程度の規模の作業場をもっており、四—五台の織機を所有しており、彼等とその労働者の間には、きわめてわずかの差があるのみであった。労働者は、親方の家で食事としばしば宿舎とを提供してもらい、親方とならんで労働し、親方を自分とちがう社会階級のものだと考えなかった。ある地域では経営者の方が労働者の数よりも多かった。この地方においては手工業から資本主義的単純協業へ、後者からマニュファクチュアへの移行はたえず行なわれていたのであるが、三者の間隔はきわめて少なかった。

これらの地方においては、生産物は、最初戸外の公共の市場で販売された。すなわちリーズでは橋の上で、ハッダースフィールドでは教会の境内で販売された。しかしその後市場にあらゆる人の数が増加するにつれて屋根のある会館が設けられた（ハリファクスやウェークフィールドでは一七一〇年頃、リーズでは一七一一年）。戸外、室内を問わず市場においては、一週に一反くらいしか持参することのできない最小の製造業者であっても、その毛織物を朝早く台の上にならべて、最も優勢な競争者と同じように、ここへやってくる商人にそれを販売する機会をもっていた。[14] 最初は、このようにウエスト・ライディングにおいては、小商品生産者あるいは小資本家達は、生産過程も流通過程（原毛購買過程と毛織物販売過程）も商人によってほとんど支配されていなかった。このような自立的な小生産者は一七四〇年毛織物約一〇万反、一七五〇年約一四万反、一七六〇年約一二万反（対仏戦争の影響で減少した）、一七七〇年には約一七万八〇〇〇反を生産している。

商人による小商品生産者の問屋制的支配の強化によるマニュファクチュラーへの経路は、イングランドの西南部や東部において顕著であり、小商品生産者の勤勉と節約、信用増大によるマニュファクチュラーへの経路は、イングランド北部すなわちヨークシャーとくにウエスト・ライディングにおいて顕著であり、全体的には西南部や東部の羊毛

工業は十六世紀後半以後ヨークシャーの羊毛工業によって凌駕され、圧倒されるのであり、ウエスト・ライディング型の小商品生産者がマニュファクチュラーになる経路が支配的であるという見方が一般的に普及しているように思われる。はたしてそうであるかどうかを見極めることは、骨の折れることではあるが骨折りがいのある仕事である。

ヨークシャーでも、ハリファクス教区では、小製造業者の独立がほとんど完全に維持されていたが、ここからわずか離れたブラッドフォード地区では、これとは反対に織元の支配下にあった。この両地区における生産形態の差異は次のような事情と関連している。すなわちブラッドフォードでは梳毛を、ハリファクスでは刷毛を織っていたが、両織物製造は技術的な細部のみか、原料価格や労働者に要求される職業的技能程度においても違っていた。梳毛織物工業の方(ブラッドフォード)は、長繊維で、高価上質な羊毛を使用し、刷毛織物工業の方(ハリファクス)は、あまり高価でなく、短繊維で、ちぢれた、利用しにくい羊毛を使用していた。前者はとくに資本を、後者は熟練された入念な労働を必要とし、さらに前者は商業的要素が優位を占める制度によく適合し、後者は「自由な小作業場」に繁栄した。(15)

「自由な小作業場」の所有者であるハリファクス周辺の織布工の場合でも、土曜日ごとに自分の製造した粗製毛織物をもって町に行き、毛織物商人に公設市場で販売せざるを得ない。毛織物商人は、織布工から粗製毛織物を購入し、それを自分の作業場で必要に応じて染色・仕上げして他の市場で販売していた。公設市場は非常に広かったが、それ以上に織布工は地方から多数集ってきたため、ハリファクス全市は一大粗製毛織物市場と化し、その中で商人は有利な取引きを行なうことができた。このように「無数の独立小生産者」(petit fabricant indépendant)のいたハリファクス地方においても、毛織物商人は、公設市場において過剰な小商品生産者に対して相対的に有利な買占商人に化しつつあったのであり、すでに染色、仕上げの工程においてマニュファクチュアを形成していたのである。「リーズ、ハリファクスでは、手工業者が自分の手で織った織物を公設市場に持ってくるが、ヨークシャーの毛織物は公設市場か

ら全イギリスにいきわたり、オランダ諸港、バルト諸国へ向けて、さらにヨーロッパのほか、レバントの諸港、アメリカ植民地にまで輸出された。工業の変形を不可避にしたのも、まさにこの商業的発展であった。[16]」

ヨークシャーでもランカシャーでも小商品生産者には二つの階層、すなわち富裕で独立した小商品生産者と貧乏で従属的な小商品生産者とが存在していた。独立の小商品生産者は、他の貧乏な小商品生産者の雇主であり、従属的な小商品生産者と主要な市場都市の大商人との間の仲介者の役割を演じていた。小商品生産者がマニュファクチュラーあるいは商人にどの程度従属して行くかを決定する重要な原因は、(原料の供給源あるいは市場に近いか遠いかということもある程度影響するが) 一つの体制の内部における生産者自身の経済的地位の程度にあった。[17] すなわち富裕なヨーマンである小商品生産者が副業的に織布業を営むときには、彼は家族を養うにたる一定の農業上の収入を獲得しているので商人の顔色をうかがわずに安い時に羊毛を購入し、高い時に織物を販売することができた。それに対して貧乏な小商品生産者あるいは零落しつつあるヨーマンの場合には、織布業は副業であっても、家族を養うにたる農業上の収入を最初から獲得し得ないために、羊毛の購入と製品の販売は商人あるいはマニュファクチュラーに対してきわめて不利となる。リーズでは「織布工は、早朝、自分の毛織物をもってやってくる……一反以上を持参する織布工は少ない」状態であり、「一反の毛織物のうしろには、販売しようとしてやってきた織布工が立っている」といった状態であった。ハリファクスにおいても大体同様であり、「周囲農村で作業する織布工は、土曜日ごとに自分の製造した毛織物をもって町にやってくる」のであり、広い公設市場に入れず路上にあふれだしていた。ウェークフィールドでも同様であった。これらの公設市場にあつまってくる小商品生産者は、大部分が農業収入における不足分を織布業によって補充しなければならない経済状態であったので、土曜日ごとに一反の毛織物を商人に引き渡さざるを得なかったのである。彼等と商人との取引きは、外観的には勢いよく、しかも平等に行なわれていたわけであるが、実際は富裕な商

人あるいはその代理人と貧乏人との取引きであった。ブラッドフォードにおいては、前述したように小商品生産者は、梳毛織物工業を営まざるを得なかったために、長繊維で高価上質の羊毛を使用していた。それらの長繊維の羊毛は、リンカーンシャーから商人によって供給され、いっそう高価なものとして取引きされたために、小商品生産者の経済状態からして彼等が自力でそれを購入して織布加工を行ない自由に販売することは困難であった。これらの理由からここにおいては早くから小商品生産者の商人織元あるいはマニュファクチュアへの従属があらわれた。[18]

ウエスト・ライディングにおけるヨーマンすなわち小商品生産者の経済状態が単純な商品流通と貨幣流通のなかで悪化してくると、公設市場での毛織物商人との取引きが不利になるばかりではなく、公設市場以外での毛織物商人との取引きが増大し、毛織物商人は直接小商品生産者に注文するようになる。一七〇六年ごろには、すでに交換業務の少からぬ部分が、公設市場から奪われつつあったことはあきらかである。さらに代理商や問屋は、ロンドン、ロッテルダム、アムステルダム、ハンブルグ等の内外の商人から注文を受け、公設市場をほとんど利用せずに織布工から製品を調達するようになった。ハノーバー朝のはじめごろになると、従来ノリッジ地方の独占であった毛織物マニュファクチュア (worsted manufacture) がブラッドフォード地方にはいってきたとき、この新しい事業部門はほとんどはじめから、西部地方の織元によく似た大資本家によって経営された。[19] このようなマニュファクチュラーは、あきらかに問屋制前貸しを行なったり、各地と取引きを行なったりしている商人からなりあがってきたものであり、一つ屋根の下で各種の製造工程を直接管理するようになった後においても小商品生産者に対する問屋制前貸的支配をいっそう強化しさえした。[20]

ランカシャー地方の綿工業は、最初から原料である棉花それ自体が外国からの輸入であり、また製品の販売先がロンドン市場に依存していたために、羊毛工業の場合よりもさらにいっそう「大商業資本家」(large commercial capi-

talists) の支配が強かった。原料は、チェザム (Chetham) やライグリー (Wrigley) 等の大商業資本家の手でロンドンから持込まれ、ランカシャー綿織物は、彼等によってロンドンで販売された。ファスチャン織 (fustians) を作っている生産者は原料供給源と彼等の商品の消費者との両方から切断されていた。そして彼等は、たいがい仲買人のサービスに依存していた。棉花の供給は、制限され、断続的であり、その価格は、動揺がはげしく、その市場は、ロンドンにおいて大規模にそして上手に購買を行なっている資本家の価格操作によって、非常に動かされやすかった。棉花とファスチャン織の商人は、生産者に対して特に強力な地位に立っていた。商人は、生産者の原料購入にあたっては掛売りを行ない、そして出来上り商品を購入した。この掛売契約によって、生産者の仲買人への経済的従属が行なわれるのであり、取引量が増加するにつれ従属度は激増した。十七世紀の最後の二〇年までに前貸制度は、非常に発展した。十七世紀のはじめのころにファスチャン織マニュファクチュアは、ちょうど定着した。あきらかに、そのマニュファクチュアは、種々の形態の生産者に対して棉花の前貸と糸の掛売を行なっていた。それらの生産者は、農民的な織布工であり、地方の小雇主であり、同時にファスチャン織の生産者であった（チェザムは彼等に棉花を販売していた）。小雇主は、彼等自身の産地における前貸人であった。[21]

マニュファクチュアの初期の段階においては、マンチェスターのより大規模なファスチャン織物商人は、後には生産の現実的な組織者になるのであるが、当時においてはおそらく生産の組織者であるよりはむしろ原料の配分者であり商人であった。ヘンリー・ライグリーは、一六二八年に、ランカシャーで棉花の売買業務と出来上り商品の売買を行なっており、さらに紡績工や織布工を雇用して彼等に労働をさせていたといわれている。[22] チェザムやライグリー程大きくないランカシャーの商人の場合も、最初は原料や製品の売買を通じて小商品生産者やマニュファクチュラーと接触し、次第に前貸制度を通じて生産者に対する支配を強化し、さらに染色・仕上工程はもちろんのこと紡績・織布

工程をも支配してマニュファクチュアを形成し、多くの労働者を集中的に支配するようになる。今やランカシャーの商人は、通常の商業的業務の外にマニュファクチュアを組織し、同時に多くの小商品生産者をも目に見えない糸で支配するようになる。ときがたつにつれて流通過程での支配よりも生産過程での支配が重きをなすようになる。ここに本来のマニュファクチュアが形成されるのである。

ヨークシャーやランカシャーとくに前者においては、ヨーマンすなわち自由で独立的な小商品生産者が多数存在し、他の地方よりもマニュファクチュラーに自成的に発展する可能性を事実持っていたわけであるが、前述のようにランカシャーにおいてはもちろんのことヨークシャー、とくにブラッドフォードを中心とする地区においては商業資本の勢力が最初から強く、商業資本による小商品生産者支配の強化の過程を経てのマニュファクチュアの形成が現実的な方向であった。十八世紀に入るとまもなく、ヨークシャーの他の地域においてもこのような傾向が強まっている。

次に商業資本の問屋制的支配の比較的優勢であった西南部や東部についてマニュファクチュア形成の実情について観察しよう。

西南部地方の「商人織元」(merchant clothiers) は、ときには「商人製造業者」(merchant manufacturers) とよばれているが、彼等は、羊毛工業における小商品生産者の製造工程に最初から関係している。彼等は、原料である羊毛を購入し、自分の計算で、刷整、紡績、織布、仕上げを行なわせる。商人製造業者は、原料を所有し、各製造工程の仕事をそれぞれの小商品生産者に行なわせ、最終生産物を獲得し、市場でこれを販売する。[23] この場合、各製造工程の小商品生産者は、外見的には独立しているが、その実体は自宅で賃加工を行なう「事実上の賃金労働者」であり、「資本主義的家内労働」者である。西南部で商人織元といわれている商人は、単なる商人ではなく、自分の作業場において若干の労働者を雇用して一種の商品生産を遂行しており、また自己の作業場と関連して外部に多数の「資本主義

的家内労働」を組織している。これらの階層は、商業的業務をかなりの範囲にわたって遂行しているわけであるが、むしろマニュファクチュラーである。もちろん当時の商人織元のなかにはここまで発展せず、問屋制商業資本家として小商品生産者を問屋制家内工業者として編成するにとどまったものもある。問屋制商業資本も小商品生産者支配の強化によってやがてマニュファクチュアへと発展して行く可能性は大であった。

外見的には独立しているが、もはや商人織元に奉仕せざるを得ない労働者は、完全に近代的な労働者ではなく、大部分が農村に居住し、ヨークシャーの小商品生産者以上になお生活の一部を農業にもとめていた。

織布工は、他の小商品生産者に比較すると独立的外観を呈し、自宅で自分の織機で作業し、ときには自分の費用で刷整、紡績等の仕事を外部者に行なわせ、道具や原料・材料を提供したりして経営者的な役割を果していた。そのような織布工は、最初一人の商人織元とばかり関係したのではなく、数人の織元が分配した作業を自宅で行なっていたのであり、そしてその下に数名の生産者を従え、あたかも「労働者ではなく、富裕な依頼者と合意で契約する下請人」の外観を呈していた。

しかし一般の織布工は貧困であり、織元から受け取った報酬から刷整工や紡績工に賃金の支払いをすますと手もとにごく少額の金しかのこらない。もし天候が悪く農業からの収入が減少したりするとたちまち生活に困り金を貸してくれる相手をさがし出すのに骨を折ることになる。織元は、素手の借金申し込み者に金を貸すことはごくまれであり、通常織機が抵当になる。たいがい、織布工の借金は営業のためであるよりはむしろ生活のためになされるのであるから現金での返済はなかなか困難となり、ついに織機は原料の支給者でもある織元の所有にきすることになる。このような収奪は、かなり前から行なわれてきたが、十七世紀末から十八世紀初期にかけてそれとわからないかたちで進展した。ついに、織元は、ヨーマンの経済的貧困状態を利用しながら、羊毛、紡糸、織機、織物等を所有するとともに、

染色場、縮絨場、販売のための店舗をも所有し、場合によっては織布工場等も所有するようになる。

西南部では、問屋制度が普及していたが、仕上工程においては、他の工程よりも早くからマニュファクチュアが形成された。その後マニュファクチュアは、他の工程にも順次侵入した。十八世紀のエクセターでは、織布工は織機を資本家から賃借し、またある場合には、自分の家で働く紡績工とは異なり、自分の親方の仕事場で労働している。また、近くのカルム・バアリーでは織布工の独立性はもはや完全に失われ、彼は親方の近くにある長屋の一角に住むことをよぎなくされ、この地区内に形造られた広場で働くことを強制された。とくに十八世紀になると、西南部ばかりではなく東部や北部においても、織元が自分の家で労働者を同時に使用し、そして労働者は織元が据えつけた織機を操作するケースが増加した。織元は、一つ屋根の下で分業にもとづく協業の組織を作り出し、訓練された労働者を使用して、同一品質の製品を多量に生産することが可能なところまで発展する。

十七世紀の匿名者の著作である "Reply to a Paper Intitled Reason for a Limited Exportation of Wool" は、当時のイングランドには五、〇〇〇名の織元 (clothiers) がおり、それぞれの織元は二五〇人の労働者 (workmen) を維持していたので、全体で労働者は一〇〇万人以上になるであろうといっている。この数字は必ずしも正確なものではないようであるが、とにかく織元に従属している生産者がすでに賃金労働者であるか、あるいは賃金労働者に近づきつつある生産者であったということを内容にしている点に意義がある。農村においては、織元が新しく生れることを禁止したギルド保護の条令が適用されなかったから、織布工は、都市の場合より織元に上昇する機会をもっていた。しかし彼等の経済状態はそれを許さず労働者の方向に押しやった。また、たとえ織布工が小織元になったとしても、商人出身の大織元に支配される場合が北部よりも、とくに西南部や東部に多かった。それらの理由は、これらの地域においては、土地が肥えてはいたが、封建的収奪がいちじるしく、農民の生活は常に貧困であり、同時にロンドンそ

の他の大都市や外国貿易の影響を受けることが大であり、それらの機会をとらえて富裕化した商人あるいは織元が根強く存在したため、その支配下に早くから組み入れられたことである。

とくに西部のコーツワルド丘陵地帯において、織布工が織元に従属せざるを得なかった理由には、織布工の貧困ということが根本にあるが、その直接的な理由は、彼等の経済力に比較して原料が割高であったということよりも、毛織物をロンドンに輸送するための時間と費用とが織布工にとってあまりにも不利であったということである。

イングランド東部地方とくにノーフォークにおいては梳毛工業（wool-combing）が優位を占めていた。前述したように梳毛織物工業は、長繊維で、高価上質な羊毛を必要とし、刷毛織物工業に比較して多額の資本を必要としたために、早くから富裕な商人が支配するところとなっていた。ノーフォーク地方には「梳毛親方」（master combers）でもある仲買商人の特殊な階層が存在していた。とくにノリッジにおいて顕著であった。商人でもある梳毛親方は、彼の主要業務である梳毛の仕事を熟練労働者に行なわせ、しかる後に彼の外交員を使用して紡績工に羊毛を配分させた。その後、彼の外交員は、紡績工のところで出来上った紡糸を回収し、割り当てた労働に対して加工賃の支払いを行なった。[24] 梳毛親方の仕事は、仲買商人の業務の発展形態であり、梳毛・紡績マニュファクチュアへの過渡的形態であった。その後の製造工程は、西部地方と同様に織元によって支配されていた。その織元は、たんなる商人出身の織元ではなく、ジェントルマンのようにふるまい、帯剣し、そしてその商業関係はスペイン領アメリカ、インド、中国にまでおよんでいた。東部地方の織布・仕上げ工程においても、中世的な外観を呈してはいるが、内外の商業において活躍している織元の支配が圧倒的であり、マニュファクチュアへの発展が圧倒的な方向であった。このようなマニュファクチュアは、一般のマニュファクチュアの宿命でもあるが、執拗に問屋制度とからまり合い、完全に問屋制度から脱却することが容易ではなかった。[25]

マニュファクチュアおよびそれによる資本主義的家内労働の支配が一般化し発展するにつれ、労働は急速に専門化し、それに照応する専門的道具の発達をみ、高度の労働手段の開発・利用が行なわれるようになる。そのような高度の労働手段は、機構が複雑で、余りにも高価であったために貧乏な職人には、それを購入して所有することが困難であった。そのような場合には、商人がその労働手段を所有し、一般の職人にその労働手段を賃貸して生産物を生産させることが一般的となる。

その一例としてメリヤス製造業の場合をあげることができる。メリヤス製造業は、メリヤス編機の発明によって急速に発展したわけであるが、その発明は、エリザベス一世時代にノッティンガムの副牧師ウィリアム・リーによってなされた。このメリヤス編機は、三、〇〇〇以上の部品からなっており、機構が複雑で、しかも当時の金で一台につき八〇ポンドもした程高価であった。その後一六六〇年から一七二七年にかけて多数のメリヤス編機が生産されるようになると、編機は一〇年あるいはそれ以下の期間賃貸料を支払えば自分のものとなるという条件で労働者に賃貸した。しかし編機はその後も商人あるいはマニュファクチュラーによって独占されていたために、賃貸料は法外な高さに引上げられ、そのため労働者の実収賃金は一週につき六シリングから八シリングに固定された。また編機を自分で所有できるようになった労働者は、一般にボイコットされ、資本家の団体である機械編メリヤス業組合の一員から編機を賃借りするまでは仕事の注文を受けることができなかった。鉄、銅、真鍮などの業種においてもこれと同じような状態が存在した。

商人による原料や道具の独占、販売市場の独占、それに資金の独占は、一般的に貧困な小商品生産者を生産手段から分離して賃金労働者への道を歩ましめ、商人自らをマニュファクチュラー(近代産業資本家)に転化せしめる。

(1) Karl Marx, Das Kapital, dritter Band, S, 366, (カール・マルクス著、長谷部文雄氏訳「資本論」第三部上四七四頁)。

(2) Karl Marx, Das Kapital, erster Band, S. 337.（「資本論」邦訳第一部下五四三頁）。
(3) Maurice Dobb, Studies in the Development of Capitalism, p. 148.（モーリス・ドップ著、京大近代史研究会訳「資本主義発展の研究」I二〇九—一〇頁）。
(4) E. Lipson, The Economic History of England, vol. II, p. 70.
(5) George Unwin, Studies in Economic History, p. 320.
(6) 秦玄竜氏著「イギリス経済史研究」二一二頁。
(7) 白杉庄一郎氏著「資本主義成立史の原型」一六三頁。
(8) 大塚久雄氏著「近代欧州経済史序説」上巻三〇三—四頁。
(9) 大塚久雄氏前掲書三〇六頁。
(10) 秦玄竜氏前掲書二一二頁。
(11) 中本康夫氏は、マニュファクチュアと問屋制度の絡み合いを指摘しながらも第一の経路を強調しながら次のようにいっている。「西ヨーロッパの先進地帯では十五・六世紀の裡に農民的＝小ブルジョア的商品経済（したがってまた局地的市場圏）が成立し、それを基盤とする農民層の両極分解が開始される。そして、市民革命をさしはさんで十六—八世紀には、右の両極分解の全面的な進行にともない、『マニュファクチュア』という歴史的形態をとりつつ資本制生産が展開したのであった」（大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄諸氏編「西洋経済史講座」II一三三頁）。また大河内暁男氏は「市民革命後のマニュファクチュアの目覚しい進展の過程で、小経営が比較的急速に発展をとげて、ついには複雑な結合経営マニュファクチュアにまで成長する、という傾向が一般的に見受けられたことは、この時期の一つの特徴として、注目に値いする」といっている（前掲書一八一頁）。
(12) 田中豊喜氏著「産業的中産者と前期的資本」一六二頁、二一五頁。
(13) マルクス・レーニン主義研究所訳「レーニン全集」第三巻三七六—七頁。
(14) William Ashley, The Economic Organization of England, p. 148. Defoe, Tour, III, p. 116～7.
(15) Paul Mantoux, The Industrial Revolution in the Eighteenth Century, p. 67.（ポール・マントウー著、徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明諸氏訳「産業革命」六三頁）。
(16) Paul Mantoux, op. cit., p. 62.（前掲書邦訳五五頁）。

(17) Maurice Dobb, op. cit., p. 149. (前掲書邦訳二一一頁)。

(18) Herbert Heaton, The Yorkshire Woollen and Worsted Industries, p. 298.

(19) William Ashley, op. cit., p. 148.

(20) ブラッドフォード地方における織元による小商品生産者支配の状態とその理由の説明は、ポール・マントゥーもウィリアム・アシュレーもほぼ同じである。またドッブはヨークシャーの羊毛マニュファクチュアの長繊維の羊毛がリンカーンシャー等の遠くから輸送される場合には「大資本家的雇主」(large capitalist employers)の支配が存在したことを言っている。この点については、ハーバート・ヒートン(Herbert Heaton)の「ヨークシャーの羊毛工業」(The Yorkshire Woollen and Worsted Industries, p. 297～8)においてあきらかなとおりである。「毛織物親方(worsted master)は、通常比較的大きな事業所の頭であった。彼は、主な定期市や農民のところに行って、かなりの量の羊毛を買い、それらを家に運び、そして彼の監督下で仕事をしている選毛工や染色工のところに配分する。それから羊毛は、広い地域にまたがって梳毛し紡績するために分配される。生産された毛糸は再び集められ、ときどき販売された。それはとくに南部の織布業者に販売された。しかしたいがいの場合、毛糸は周辺の家内織布工(domestic weavers)に配分され、彼等によって織物が生産された。織布工は、一反一反の支払いを受けた。クラハム教授(Professor Clapham)は、ハワーズ(Haworth)の近所のオクスンホープ(Oxenhope)のグリーンウッド氏(Mr. Greenwood)の場合を例にあげている。すなわち彼は、羊毛を購入し、そして数人の職人の援助で家において梳毛し染色していた。そしてそれは紡績に出され、しかる後、毛糸は販売されていたのである。そこには、この種の人達、すなわち多量に毛糸を準備した親方梳毛業者(master woolcombers)と紡績業者(spinners)とが沢山いた。他方、多くの毛織物親方は、選毛から織布までのマニュファクチュアの工程全部を営んでいた。ハーガス家の初期の歴史は、その種のみごとな実例を提供している。一七一五年ジェームズ・ハーガス(James Haggas)は、ハリファクスの毛織物業者(worsted weaver)のところに徒弟奉公に行った。彼の修業が終了して後……彼は、毛織物のマニュファクチュラーとして出発し、梳毛工と織布工を雇い、毎土曜日ハリファクスにおいて反物を販売した。彼の息子ジェームズは、リンカーンシャーの市場に行って長繊維の羊毛を買い、それを家に運び、倉庫でもあったオークワーズホールで選毛し、しかる後各種の職工の手にわたした。反物は、丘の中腹を越えて散在している家々で織られ、市の日の一日前の毎金曜日に、人々は、頭あるいは背に重い反物をのせてウィーセッド(Weethead)(ジェームズの家のあるところ)にあらわれ、帰りには縦糸と横糸のバッグをもってもどった」。なおヒートンは、manufacture of woollen cloth は小規模織元の手中にあった

し、worsted industry はかなりの規模において事業をいとなんでいる親方の手中にあったことを指摘している。長繊維の羊毛は後者において必要とされたのであり、そこにおいては原料の確保のためにかなりの資本が必要であったのであり、小商品生産者は商人あるいはマニュファクチュアに従属せざるを得なかった。

(21) Alfred P. Wadsworth and Julia De Lacy Mann, The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780, p. 36.

(22) Wadsworth and Mann, op. cit., p. 37.

(23) Paul Mantoux, op. cit., p. 63.（前掲書邦訳五九頁）。

(24) Paul Mantoux, op. cit., p. 67.（前掲書邦訳六三—四頁）。

(25) 秦玄竜氏前掲書二三一頁。

三　技術的にみたマニュファクチュアの発生経路とマニュファクチュアの諸形態およびマニュファクチュアの諸特徴

マニュファクチュラーの発生経路が商人からであろうと小商品生産者からであろうと、場合によったら封建的支配者からであろうと、「分業にもとづく協業」の組織としてのマニュファクチュアが登場することには変わりがないのである。

そのようなマニュファクチュアは技術的観点からみれば次の二重の仕方で発生する。

第一の発生の仕方は、一定の生産物を最終的に生産するのに必要な各種の自立的手工業者が同一の資本家の指揮によって一個の作業場に結合させられる場合である[1]（異種手工業者の結合）。客馬車マニュファクチュア（Kutschenmanufaktur）や織物マニュファクチュア（Tuchmanufaktur）はその一例をなすにすぎないが、そこでは、異種的な作業に従事した各種の自立的手工業者が、資本家の作業場に結合させられて、手工業者としてではなく個々の労働者として資本家の指揮のもとで社会的分業のかわりに経営内分業を遂行するようになる。資本家による経営内分業が実現すると、

かつての手工業者はその自立性を全く失って単なる部分労働の遂行者として組織の一環にくみこまれる。このような仕方で出来上ったマニュファクチュアは、経営内の異種的作業工程の一部を他の小商品生産者に依頼することが容易にできるし、またそのことが技術的にも経済的にも必要である。したがってこの種のマニュファクチュアはとくに資本主義的家内労働を外部的に組織することが必要である。

第二の発生の仕方は、同一または同種の作業を行なっている多数の手工業者が、同一の資本家の指揮によって一個の作業場に結合させられる場合である(同種手工業者の協業あるいは結合)。同じ資本家のもとに雇用されるようになった同種手工業者は、最初、従来からの手工業的方法で完成品を生産した。やがて同じ場所への労働者の集中と彼等の労働の同時性とは、同一作業場内での組織的分業を発生させる。作業は、互いに引離され、孤立させられ、空間的に並立させられ、それらの作業の各々が別々の手工業者(労働者)に割り当てられ、全作業を一緒にしたものが協業者たちによって同時に遂行される。このような技術的発生経路によって生れたマニュファクチュアには、紙、活字、針、ピン等のマニュファクチュアがある。(2)

マニュファクチュアは、異種的手工業者の結合によって発生したにせよ、あるいは同種手工業者の結合(協業)によって発生したにせよ、いぜんとして人間をその諸器官とする一生産機構である。したがってマニュファクチュアにおける作業は、いぜんとして手工業的であるために、用具の使用にあたっての個別労働者の力や熟練や敏速さや確実さに依存せざるを得ない。マニュファクチュアにおける各部分の生産過程は、手工業的部分労働とくに手工業的熟練労働に依存せざるを得ない。

マニュファクチュアの技術的な一般的特質は、手工業的技術を基礎とした組織的分業である。このマニュファクチュア的分業は、社会で行なわれていた自然発生的分業を作業場内で再生産し体系的に徹底させることにより、「細目

労働者」(Detailarbeiter) の技術的熟練をうながし、作業の継続性を高め、労働力の不生産的消耗を減少し、労働の生産力をいちじるしく増大させる。

マニュファクチュアにおける労働の生産性の増大は、労働者の熟練度の増大に依存するばかりではなく、道具の発展にも依存している。分業の発展は、部分労働者の熟練度のみを増進させるだけではなく、同時に労働用具の「分化」(Differenzierung)、「特殊化」(Spezialisierung) をもたらす。マニュファクチュア時代は、一定の部分労働者の特殊的機能の遂行のためには一定の労働用具のみが使用され、道具のいちじるしい発展がみられる。道具は、簡単化し、改良され、多様化される。この時代は、簡単な諸用具の結合から成り立つ機械の物質的諸条件の一つを創造する。この時代には、分散的には、道具の発展とその結合によって機械の使用がみられるにいたる。

マニュファクチュア時代に独自的なものは、多数の部分労働者たちから結成された全体労働者そのものである。マニュファクチュアにおける種々の作業が分離され自立化され孤立化されたのち、労働者たちがその勝れた属性に応じて、分割され分類され群別される。この場合、部分労働者の諸器官は、その独自的機能にのみ用いられ、その生産的属性は最も経済的に支出される。部分労働者の一面性はもちろん不完全性さえもが、全体労働者の手足としての彼の完全性となる。このようにマニュファクチュアは、特殊化された労働者そのものを組織的に編成した機構なのである。

全体労働者の種々の機能は、簡単なものもあれば複雑なものもあり、低級なものもあれば高級なものもあるので、個別的諸労働力は、極めて相異なる程度の訓練を必要とし、したがって極めて相異なる価値を有する。したがってマニュファクチュアは、労働力の等級制 (Hierarchie der Arbeitskraft) を発展させる。マニュファクチュア的分業は、手工業経営がきびしく排除したいわゆる不熟練労働者の階層を生みだした。分業は、高度な専門的道具を操って一定の精度の商品を生産する熟練労働を求める反面、たいていの人間ならばできるような不熟練労働を欲求する。労働力の

等級的区分と相並んで、熟練労働者と不熟練労働者とへの労働者の簡単な区分が生ずる。不熟練労働者にとっては修業費がまったく不要となり、熟練労働者にとっては修業費が機能の簡単化のために手工業者と比較して減少する。どちらの場合にも労働力の価値が低下する。修業費が不要となりまたは減少することから生ずる労働力の相対的な価値減少は、剰余労働の領分を延長させることになり、マニュファクチュラーによる相対的剰余価値獲得を現実可能にする。

マニュファクチュア的分業を特徴づけるものは、部分労働者が商品なるものを生産しないということであり、部分労働者たちの共同生産物がはじめて商品に転化されるということである。社会内分業は、種々の労働部門の諸生産物の売買によって媒介されており、相互に独立する多数の商品生産者たちの間への生産手段の分散を内蔵している。それに対してマニュファクチュア的分業における諸部分労働の関連は、種々なる労働者によるそれぞれの労働力の資本家への販売によって媒介されている。なおマニュファクチュア的分業は、一個の資本家の手における生産手段の集積を内蔵している。したがってマニュファクチュア的分業は、資本主義的生産様式のまったく独自の創造物であると言い得る。マニュファクチュア的分業は、前述のところからもあきらかなように相対的剰余価値を生みだすための、または資本の自己増殖を労働者の犠牲において高めるための一つの特殊的収奪方法である。(3)

マニュファクチュアは、その生産物の性質に基礎づけられて本質的に相異なる二つの形態に分類できる。この二つの形態はときには絡みあって存在する。

第一の「異種的マニュファクチュア」(heterogene Manufaktur) は、生産物が自立的諸部分生産物の単に機械的な組合せによって形成される場合のマニュファクチュアである。この異種的マニュファクチュアの典型的形態は時計マニュファクチュアにおいてみることができる。時計の部分品のうちで種々の労働者の手を経るのはごくわずかであって、これら一切のばらばらになった部分品は、それらを最後に組み立てて一つの完全な機械たらしめる労働者の手で

初めて結合される。[4] 時計およびそれに類似した生産物を生産するマニュファクチュアの生産過程は、多数の異種的過程に分裂して、相互のあいだに直接の連絡がないために、共同的労働手段の使用がほとんど不可能であり、経済的、技術的非合理性が多く、それらをとりさることがなかなか困難であった。したがって生産の異種的過程の各種の作業は、独立的な手工業にそのまま依頼されたり、あるいはマニュファクチュアの外業部としての資本主義的家内労働に依頼されたりする。この種の生産物すなわち多数の部分品の組み合せを必要とする生産物を作る製造部門においては、完全に集中的なマニュファクチュアはなかなか形成されず、分散的な傾向が顕著である。商業資本による問屋制家内工業支配、あるいはマニュファクチュアによる資本主義的家内労働支配の場合には、作業用の建物をはじめ、道具や場合によったら原・材料等への出費を節約することができる。[5] 異種的マニュファクチュアの場合には、生産過程が分裂していて、相互のあいだに直接の連絡がないため大工業の機械経営に転化するのが困難であった。したがってこのような種類のマニュファクチュアが産業革命を経験するに至ったのは、かなり遅れてであった。

第二の「有機的マニュファクチュア」(organische Manufaktur) は、生産物の完成姿態を一系列の連絡した諸過程および諸操作に負う場合のマニュファクチュアである。この有機的マニュファクチュアの典型的形態は、縫針マニュファクチュア、ピン・マニュファクチュア、紙マニュファクチュア等においてみることができる。この種のマニュファクチュアは、連絡のある発展的諸段階すなわち連続的な段階的諸過程を通過する製作物を生産する。その場合、原料は、種々の部分労働者の手で、その最終姿態に至るまでの生産段階を時間的に相次いで通過する。これに反し、作業場を一個の全体機構として考察するならば、原料は同時に、そのすべての生産段階に一度に存在する。[6] アダム・スミスにならってピン製造の場合を例にとれば一人の男は針金をひき延し、他の男はそれを真直ぐにし、第三の者はそれを切断し、第四の者はそれを尖らし、第五の者はそれの先端を摩擦して頭部をつける準備をする。そして頭部をつけ

るにもさらに二—三の独立の作業が必要である。すなわち頭部をつけること自体が一つの作業であり、ピンを磨くことがまた一つの作業である。ついでそれを紙に包むこともまたそれ自体一つの作業である。(7) これらの作業は同時に行なわれ、一人の労働者は他の労働者にその労働の成果を原料として提供するのであるから、種々の段階的諸過程は、時間的継起から空間的並列に転化されている。それ故に、労働生産性は増大し、アダム・スミスが言うように一日に十人の労働者が四万八千本以上のピンを生産し得るわけである。有機的マニュファクチュアにおいては、まったく異なる労働の連続性、一様性、規則正しさ、秩序、およびいちじるしい労働強度が生みだされる。有機的マニュファクチュアのそのような生産過程の技術的特徴からして、それは異種的マニュファクチュアに比較し産業革命をより容易に経験しやすく、しかも工場制工業へすみやかに発展しうる性質をもっていた。

第三の「結合マニュファクチュア」(kombinierte Manufaktur) は、大規模なガラス・マニュファクチュアが、その必要上、土製の熔解坩堝マニュファクチュアと結合しているように、生産手段のマニュファクチュアと生産物のマニュファクチュアとが結合している場合である。またその反対に、生産物のマニュファクチュアがこの生産物そのものを再び原料としているマニュファクチュアと結合している場合でもある。いずれにせよ、結合マニュファクチュアは、その経営主に幾多の利益を提供するにもかかわらず、異種的マニュファクチュアや有機的マニュファクチュアのように、それ自身、技術的統一性をもっていない。この種のマニュファクチュアが産業革命を経験して工場制工業に転化する場合には、一部分がよりすみやかに機械化し、他の部分は旧態いぜんとした形態をしばらく保持せざるを得ないということもあり得る。しかしこの種のマニュファクチュアも工場制工業に完全に転化すると、はじめてその統一性を確保することが現実的に可能となる。

いずれの形態のマニュファクチュアも、一つの経営の内部で資本家による労働者の分業的支配体制を一応整えては

いるが、マニュファクチュアは全体として手工業的な狭隘な技術的基礎の上に立っており、しかも労働者そのものから独立した客観的な骨骼（機械体系）を有していないがために、すべての社会的生産をとらえ、それを根本的に変革することはできない。[8] したがってマニュファクチュアは、農業と結びついた小商品生産者を駆逐することができず、むしろ後者を資本主義的家内労働（者）として再編成することによって、みずからの技術的、経済的劣弱性をカバーしようとするのである。それ故に、資本主義的家内労働は、工業における資本主義のすべての発展段階においてみられるわけであるが、とくにマニュファクチュア段階においてもっとも特徴的なものとなる。マニュファクチュアは、問屋制前貸的支配を媒介とする資本主義的家内労働支配によって、作業場の建築物、その他等に多くの資本や多くの時間を費さずに、欲するだけの規模に生産を急速に拡大することが可能となる。

（1）Karl Marx, Das Kapital, erster Band, S. 352.（「資本論」邦訳第一部下五六三頁）。
（2）Karl Marx, a.a.O., S. 353.（前掲書邦訳五六四—五頁）。
（3）Karl Marx, a.a.O., S. 383.（前掲書邦訳六〇三頁）。
（4）Considerations upon the East-India Trade, p. 70.
（5）Karl Marx, a.a.O., S. 359.（前掲書邦訳五七二—三頁）。
（6）Karl Marx, a.a.O., S. 361.（前掲書邦訳五七五頁）。
（7）Adam Smith, An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, p. 6.（アダム・スミス著、大内兵衛氏訳「国富論」I二四頁）。
（8）マルクス・レーニン主義研究所訳「レーニン全集」第三巻三九五頁。